

人とつむぎ、 織りなす日々のなかで 高齢期の発達

第11回 住み慣れたところで、 自分らしく暮らし続ける

先月号まで、入所施設であるもみじ・あざみのみなさんを紹介してきました。ほとんどの人がもみじ・あざみの同じ敷地内で何十年も、共に暮らし、しごとに携わって、支え合っ
てこられました。みなさんのなかには、地域の働く場所に
通って、長年働いてきた人たちがいます。

その働く場の一つが、石部の街で地域と共に働き、暮らす
ことを大切にしてきた「(株) なんてん共働サービス」で
す。今回は、1981年に二人の障害のある青年と共に同社
をはじめられた溝口弘さんにお話を聞きました。さまざま
事業にとりくんでおられますが、はじまりや全体像につい
ては別の機会に譲り、ここでは障害の有無を超えて地域に根ざ
す高齢期と看取りの支援に注目して紹介します。働き暮らし
てきた場所が施設か、地域かのちがいを越え、高齢期の発達
と支援に大切な視点を考えます。

「(株) なんてん共働サービス」の社員たちが障害のあるなし
に関係なく、共に働いている姿があります。しごとが終われ
ば、障害のある人たちは地域につくられたグループホーム
で、自分らしく過ごすことができるように支援を受けながら
暮らしています。

高齢者のグループホームでは、住み慣れた地域で、ちよ
つと近くに引っ越しただけのような暮らしが続けられていま
す。住み慣れた場所であるからこそ、家族や馴染みのある人
たちとの交流を続けることができます。たとえ認知症になっ
て、できなくなったことやわからなくなったことが増えてい
っても、これまで暮らしてきた場所や人との関わり、大切に
してきたことから切り離されることのない支援がめざされて
いるのです。



▶ 共生舎なんてん



▶ なんてん共働サービス。作業中



張 貞京

ちゃん ちゃんきょん/京都
文教短期大学准教授。共
に『保育者のためのコミュニ
ケーション・ワークブック』
(ナカニシヤ出版)。

地域で共に働き、共に喜ぶ

地域の建物清掃と緑地維持管理を業務とする「(株) なん
てん共働サービス」からはじまり、小規模多機能型居宅介護
事業所である「秋桜舎」「樹林」、訪問介護事業所「共生舎な
んてん(高齢者デイサービス)」、「特定非営利活動法人NP
Oワイワイあほしクラブ」が運営する「高齢者グループホー
ムわいわい」、「グループホーム「ホワイトハウス」(南花(さ
ざんか)」など、たくさんの方が活躍が促されています。

溝口さんは、これらの事業展開について、障害の有無にか
かわらず、地域のなかで共に働き、共に生きるために、むず
かしいからこそチャレンジしようと考え、ニーズに応じてい
くうちにつくられたものだと話します。しかし、それは自分
との闘いの連続であったと穏やかに語られました。

石部の街では、地域の建物や公園、時には個人宅の庭で、

溝口さんは、高齢者への支援について、「おとしよりの歴
史や文化を充分に知らなければ、尊厳ある暮らしに向けた援
助は不可能」であると話します。そこには、自分の人生を精
いっぱい歩んでこられた一人ひとりを尊重する眼差しと姿勢
があります。

障害があっても、高齢になっても

地域で共に暮らす高齢者と障害のある人が、みんなで助け
合い支え合って暮らし続ける一つの例が、高齢者のデイサー
ビスで働く「いきいき生活支援員」と名づけられた障害のある
介護スタッフです。溝口さんは次のように紹介しています。

「2000年「共生舎なんてん」の開設にあたっては、こ
く自然に障碍のある人がスタッフとなった。スタッフとなっ
たK子さんの主な仕事は、簡単な掃除や食事の準備・片付
け、買物や散歩の同行、ゲームや歌などへの参加であった。
ダウン症の障碍のため目も悪く、掃除や食事の後片付け等は
なかなか充分にはできなかった。お盆に食器を載せて運び始
めると「ほらそこに椅子があるで」とか「ゆっくり歩き」と
いったおとしよりの声が飛んだ。買物や散歩の時は「赤い
リングにー」という彼女の歌声におとしよりの顔がほころ
んだ。こうして、彼女がいることによっておとしよりに役割
が出来たり、場の雰囲気明るくなったりした。またそうし
た動きにより、職場内が柔らかくなったり、時にはご近所さ
んの笑顔を生むこともあった」

「いきいき生活支援員」だけで、デイサービスを成立させ